



迷宮の冒険者

「た、たすけ……」
言葉が通じないとわかっていても
懇願せずにはいられたかった

そして
……チヨロ……チヨロロ
あまりの恐怖から失禁した
だがそんなことを気にしている余裕は
今の彼女にはなかった

獲物が逃げられないことをわかっているのか
モンスターはさつきとは打って変わって
一歩、また一歩とゆくり近づいて行った
それが彼女の恐怖をより一層駆り立てることを
知って楽しむかのように





チロロロ……
チロロロッ
「ふう、間に合った」
生い茂った草花の隙間にしゃがみ込むと
彼女は溜まっていたものを一気に放出した

ジヨボボボボボッ
よほど我慢していたのか
しばらくの間
彼女の尿が柔らかな地面を
穿つ音が響いていた

ぶっ
ぶっ
ぶっ
ぶっ



モンスター級の巨大なものに
内から膀胱を押しつぶされ
彼女の股間からは尿が漏れ出ていた

イチャイチャ

自分の意思とは関係なく
漏れ出る状態に
彼女は混乱し恐怖を覚えた

ちゅちゅ

え？

「うあああああー！」
何とか逃れようと抵抗していた彼女だが
ミシリとモンスタが彼女の腕を押さえている
脚に力をいれると声を上げ急に大人しくなった

稽古などで骨を折ったりしたことはあるが
そのときは気丈に耐えることができた
でもそれは命の保証があったからだ
今は違う
死がすぐ背後にいるのだ
絶望で心が折れる
恐怖で涙があふれる
いつの間にか彼女は
失禁していた

うあああ。

キャーキャー



尿意を催し
仕方なく用を足そうとしたとき
彼女はモンスタールに襲われた
とつさに剣を取るが一瞬遅い
雷で拘束されてしまった

モンスタールは
彼女の胸に種を植え付けようと
触手で器用に服を破いていく

その時我慢していた
尿が一気に噴き出した
逆さまになった状態で噴き出すそれは
まるで噴水のようにだった

あっ!?



それは冒険に慣れ始めた頃だった
実力もついてきたし
この階を縄張りとしている
モンスターの一体を
討伐しに行こうという話になった

油断をしたつもりはなかった
準備を怠ったつもりはなかった
あつという間だった
前衛が一人また一人とやられ
回復役もやられたところで
彼女はわき目もふらず逃げ出した

助けを呼ばなくては
自分だけでも生き延びれば
仲間を助けられる

……しかし森の中では相手の方が
圧倒的に有利であった
逃げられないと悟ったとき
全身から力が抜けその場へたり込んだ

皮肉にも恐怖で敵を支配する職業の彼女が
恐怖にとらわれていた



次の瞬間モンスターが彼女に覆い被さった
死を覚悟し目を閉じる
しかしその瞬間はなかなか訪れない
恐る恐る目を開けると……

そこにはモンスターの陰茎が見えた
自分の腕よりも太いそれを見て
これから起こることを想像し
再び恐怖に襲われるが
もはや為す術はなかった

そしてモンスターは
テラテラとしたそれを
容赦なく一気に突っ込んだ



「……………!!!」
声にならない痛みが突き抜ける



しかしモンスターは
そんなことはおかまいなしに
突き続ける

彼女には耐えることしかできなかった
そして……



その後もしばらく彼女を犯し続けていたが
精を吐き出して目的を果たしたのか
モンスターは樹海の奥へと消えていった

命は取られなかったものの
圧倒的な力で蹂躞された彼女には
もはや動く気力は残っていなかった

縄張りの主が去ったあとには
小物のモンスターの気配が
集まりつつあった……

ドロオ

ゴパン



「はあ……外でするのはやっぱり緊張するわね」
冒険を初めてそれなりの時間が経つが
仕方がないとは言えトイレ以外の場所
用を足すことへの抵抗は
なかなか消せるものではない
「私は繊細なのよ」
「デリカシーのない仲間の一人を
思い浮かべながら愚痴る

ポコッ
その時彼女の真下の地面から何かが顔を出した
本来もう少し奥にいるモンスター幼体である
生き残るための野生の知恵なのだろうか
比較的敵の少ない場所で
子供を産んでいったのだろう

虫除けやモンスター除けは
していたが最初から
そこにいたものはどうしようもない
真下からの闖入者に彼女は
まったく気付けなかった

ぽよ……

ぽよ……



「はあ……はあ……」
彼女が尿を出し終えたと
そこにはもうモンスタの姿はなくなっていた
彼女の尿に驚き
出てきた穴から戻っていったようであった

「ねえ、遅いから様子を見に来ただけで何かあった？」
ビクツと体を震わせると彼女は声をかけられた方を
勢いよく振り向く
やや離れたところに木の陰から肩だけが出ているのが見えた
パーティの女性の一人だった
許可があるまではこちらを見ないよう
配慮してくれているのだろう

「あ……っと、大きい虫がいて
びくくりしちゃって……
ごめんなさい、すぐ戻るから」
今起きたことなど聴かずかしくて
言えるわけがない
彼女は自分の胸の内にとまると
再び冒険にもどるのであった



「なんのつもり!!放してっ!!」
そこには一人の女性が
複数の男に押さえつけられて
いる姿があった
「演技はもういい、金部バ
レてんだよ」
リーダー格の男が下卑た
笑みを浮かべる

最近「新米冒険者、しかも
女性だけが迷宮で命を落と
す数が増えていた不審に
思った彼女のギルドは
独自に調査し目星をつけた
ギルドに仲間として潜入し
たまではよかつたが……」

「おいあんまり暴れんなよ
かわいなお手てが斬れちま
うぜ」
「早くしようぜ、待ちきれぬ
をー!」
「そうだな、それじゃあさ
うさー!」

しん

ま



「こりや全然使ってねえな
いい締まり具合だぜ」
「あなたのものは使い込んでる割に
全然気持ちよくないわね」
「女は見下すような笑みを浮かべて男を挑発する
息上がつてくせにこの女つ！」
「押さえつけている男が声を荒げた
「いいじゃねえか、新米どもは
すぐおとなしくなつちまうからな
これくらいの方が楽しめる」
「そのまま男は愉しむように
腰を動かし続ける

「はっ
はあ」
こんなやつらに
体を好きにされるのは
我慢ならないが
隠れてついて来ていた
もう一人の仲間が
今頃ギルドメンバーや兵士を
呼びにいてるだろう
自分はそのままで時間を稼ぐだけだ

「それじゃお待ちかねの一発目だ」
（くその中に出される）

「あつ!!ちよっ!!」
押さえ役の男が驚いたように声を上げるが
ビュルッビュルッ

とん
とん!!

「あーもう、俺らがいるんだから
最初の一回は中出ししない約束だったろお」
「すまんすまん久しぶりにイキのいい獲物だったからよ」
随分勝手なことを男たちは話している

この代償は高くつくぞ
と、女が胸の肉でほくそ笑んでいるとも知らずに





「お待たせー」
突如、緊張感のない声がかけられる
「この声は……よし、仲間が来てくれた」
しかし現れたのは一人だった
「え？ど、どういう？」
「驚いたか？後ろを付けていたお前の仲間は
実は俺たちの仲間でした〜!!」
男の言葉に彼女の頭は混乱する
「だってあの子はおわりと初期からいるメンバー
そう簡単に裏切るなんて……」
「お前らみたいな妙な正義感振りかざすギルドは
面倒だからな。早い段階で仲間を送り込むんだよ
初期メンバーってのはそれだけで
疑われにくくなるからな」

「めんねえ」
ギルドメンバーのその言葉を聞いて
彼女の表情は驚愕の色に染まる
「あくその表情たまらない!」
次々と信じられない言葉が聞こえてくる
そして自分にもう助からないんだと
彼女は悟った

フポ
トロオ



「くっ……は、放して！」
小柄な女冒険者は自分の体をがっちりと掴む
モンスタ―に向かって叫ぶ
めいっばい！の力で自分をつかむ腕に拳を叩きつけるが
万力で固定されているかのようにびくともしない
当然だ、彼女の細腕でどうにかできるなら
屈強な仲間たちが周りに転がっているはずがない

「ビリビリビリ！」
「きやあああ！」
モンスタ―が彼女の服を
乱暴に破り捨てる

「いやああ」

そして彼女の股間を
いきり立ったものをあてがった
「う、うそっ！いやっ！いやああああ！」
彼女は取り乱しいっそう暴れるが
状況は一切変わることはなかった



ズブウ！
モンスター！のものが彼女の股に突き刺さる
「かっ！ひっ……は……っ」
あまりの衝撃に悲鳴も上げることができず
哀れな冒険者は口をばくばくさせた

ボコォ

人間とは比べ物にならない
大きいものを入れられて
彼女の腹は内から押し上げられていた

わ……

か……

モンスターは冒険者を玩具のように前後に激しく揺らす奥に突き入れられるたびに彼女を鈍い痛みが襲う



(……みんな、助けて)
心の中で自分より先に倒れた仲間に助けを求めている



モンスターが動きが激しくなり
彼女はハツと我に返る
「抜いて！抜いてえええええ！」
モンスターの子など孕むはずがないと
理解しつつも叫ばずにはいられた
ビュルウウウウウウ！

彼女の言葉は聞き入れられるはずもなく
モンスターは彼女の中に精を吐き出した

ブルルウウ！

やあ
あっ

射精後の快楽に浸っているのか
モンスターはそのままの姿勢で止まっていた
冒険者もまた身動きせず止まっていた
いや、気を失っていた

ゴポ

ゴポ

ドロ
ー
ア

ひ
ゃ
ー

ひ
ゃ
ー

彼女の股間からは入りきらなかった精液が
とめどなくあふれ出していた





「初めは戸惑いましたが
樹海での作法もだいぶ慣れてきました」
そう独り言を言うと
彼女はするすると下着をおろす

スル

スル

プル
プル

プルンッ
肌に柔らかな心地よい感触を覚える
「え？なに、なんですか？」
驚き感触の原因を確かめようと振り返ると
そこにはゼラチン質のモンスターが
彼女の両手を包み込んでいた

完全に油断していた
彼女は急いで振り払おうと手に力を込める
しかしそのプルンとした見た目とは裏腹に
彼女の手はがっちり拘束されびくともしない

プルンッ

！！

おやっ

「そ、そうです！
皆さんに助けを……！」
そこでハッと気づく
自分が下半身丸出しなこと
こんな姿見せられない
特にあの方には……
彼女はできる限り自分の力で
なんとかしようとする

彼女が悪戦苦闘していると
ニユルンッ
無防備な彼女の腔内に
モンスターが侵入してきた
「ああっ！そこは!!」

彼女の中で暴れまわるのかと思いきや
モンスターは優しく体を震わせるだけだった
「あっ！だ、だめです!この感覚……」
どうやらモンスターは
彼女の分泌物を吸収しているようだった

彼女の息が荒くなるにつれ
モンスターも動きを活発にし
より多く分泌物を出させようとする

あっ♡

はぁあ♡

プル

ニユル

プル





「そ、それ以上は！
あつ、あつ……
あああああああ！」

絶頂と同時に本来の目的であったものが
プンヤアツと吹き出す

ふ、あ、あ、あ

アツ、アツ

必要な分は吸収できたのか
モンスターは去っていった
「ああ…私ったらなんて
はしたない」

こんなことになるなら
恥を忍んで助けを呼べばよかった
そう、今のは運がよかっただけだ
殺されていてもおかしくなかった

改めて樹海の恐ろしさを
体感した彼女は
決意を新たに仲間の元へ
戻るのだった

フワ



「お客さんどうです？
ミルク搾りで鍛えた
ウチの手捌きは」
あまりの気持ちよさのためか
男は返事もできずブルツと震えた

「あ、出そうですか？
いつでもいいですよ」
「そう言うと言った動きを
激しくする」



ビュルルッ
たまらず男は射精する

あはっ♡

「えへへ、すごい量ですよ！」
手のひらに大量の精を受けながら
嬉しそうにしている



「もー！お客さんが出しすぎるから
床に零れちゃいましたよ」
手のひらからは
受け止めきれなかった精液が
ポタポタと垂れ落ちていた

あーっ

「なーんて、怒ってませんよう♡
最後までちゃんと奇麗にしますね」

ポタ
ポタ



そう言うのと
チユ。パツズソソソソソ
尿道に残った
精液も吸い取るように
激しく吸引する

イッたばかりのものに
その吸引は刺激が強く
男はまたも体をビクッと震わせた





「……っ!!!」
ビュルルッ
小さく唸ると男はすぐにまた射精してしまった

「んんっ!」
一回出したとは思えないほどの量の
精液が女の口の中に広がる

んんっ

んんっ♡

んんっ

男の射精が終わると女は
ゴキツと喉を鳴らして飲み干した
そして全部飲んだと報告するかのよう
にからっぽの口を開け舌を出す
「えへへっ、お客さんのミルク飲んじやいました♡」

えへへ

「お客さんだけの特別サービスですからね
他のお客さんには内緒ですよ♡」
そういうと少し照れくさそうに笑った



「くそっ！放せ！」
腕には自信があつた
現にパーティの中で最後まで残つたのは彼女だった
だが今はモンスターに組み伏せられている
リーダーの逃げるという言葉に反応し
駆けだしたがわずかに遅かつた
背後から飛び掛かられ最悪の状況に陥っていた

力自慢の彼女でもモンスターの巨体を
押しつけるのは無理だつた
精々通じるはずのない悪態をつくのが
精いっぱいであつた

ひんがし

オシ

ビリビリッ
モンスターが服を噛みちぎる
臀部が露になり羞恥を覚えるが
即座に別の感情に塗り替えられる
背後のモンスターの息遣いが
荒くなつていくのが分かつたからだ
「ま、まぢか……」



悪い予感に汗が一気に噴き出る
「やめっぐざいいいいいっ!!」
彼女の言葉など全く耳を貸さず
発情したモンスターは一気に突き入れた

そしてそのまますぐに
カクカクと腰を振り始める

ズン
ズン
ズン

いっ!
いっ!
いっ!

ギョッ

その姿はまさに
交尾という言葉が
ふさわしかった





ドブツ！ドブツ！
モンスター級の射精が始まる
「あっ、出すな！くそっ！抜けえ！」
彼女は無意味な抗議を繰り返す」としかできない

凄まじい量と勢いの精液が
ビチビチと子宮に
叩きつけられるのが感じられる
それが気持ち悪く
そして無様で情けなくて
たまらなかった

あぁっ

モンスター射精はまだ続いてた
結合部から溢れ出した精液が
彼女の背中を伝って下に落ちる

タラァ

トロ

自分の腕なら大丈夫だと思っていた
だがこの迷宮では自分など
かられる側の存在の一つでしかなかった
いまはただ生きて帰りたい
それだけだった

あーん



一瞬の浮遊感
彼女が空中で拘束されていた
植物のようなモンスターが
枝を触手のように伸ばし彼女の
四肢の自由を奪ったのだ

ing??

何とか解こうともがくが
力を逃がされて効果はない
武器を落とさなかったのはさすがだが
手首の力だけでは斬れるはずもなく
打開策は見つからない





ビリビリ...
モンスターは器用に触手を
タイツに引つ掛け破いていく

「なっ!!」
大事な部分が露になり
顔が朱に染まる



だがそれを目にしたとき
一気に血の気が引く
彼女の生殖器の前に伸びてきた
触手の先には実のようなものが
付いていた

街の酒場で耳にしたことがある
他の生物の体内に種を植え付けて
宿主の栄養を吸い取って成長する
モンスターのことを

もちろん宿主が
その後どうなるかなど
言うまでもない

「やめて！やめてえろ！」
狂ったように暴れもがくが
拘束が緩まる気配はない

うああ

ズブウ！
樹液のようなものが
潤滑剤になつているのだからか
あっさりとは彼女の中に入った

ズブウ

奥まで進むと
種の先に付いて
子宮口をこじ開け
中に入り込む
「ぎゅっ！がああ
あああああ！！」
激痛と未知の恐怖に
彼女は断末魔か
と思つたような
声を上げた

触手が引き抜かれる
そこにはもう種は付いていなかった
それを見た彼女の全身から
一気に力が抜ける

「早く……早く街へ帰らないと……
診てもらわないと……」
ぶつぶつと呟く彼女の瞳は
どこか遠くを見つめていた



「これを胸で挟む……のか？」
「借りを作ったままでは嫌だからと
礼を申し出たのが不味かったのか
彼女の目の前には立派な男が性器をひえ立っていた
「オレに出来ることならなんでもとは言ったが……
いや、約束は約束だ！ やつてやるぞ」

そういうと
彼女の豊満な胸で挟みこむ
「しかしなんで男は
こんなものが好きなんだ？
戦うのに邪魔でしか
ないんだがな」

むにゅ

むにゅ
むにゅ



「このまま上下に揺らすのか？」
ぎこちない手つきで胸を動かす
しかしさすが一流の冒険者というべきか
すぐにコツをつかみ上手く揺らし始める

「何の緩急を付けたり
左右別に動かすのか？
……注文の多いやつだな」
文句は言うが素直に従う彼女に
男は満足そうだった

……ううか？

「だがこれは……
思っていた以上に
恥ずかしくなってきたぞ」

ぷるる。

ぷるる。



男の体が一瞬強張ったかと思うと
ビュルルンと勢いよく射精した

わあ!?

ビュルルン

「うわっ!!」
胸を動かすことに
集中していた彼女は
突然のことに
驚きの声を上げた



パタタンと精液が彼女の顔に降り注ぐ
(こんな勢いよく出るものなのか)
心の中で息ついたあと
少し不満気な顔で男をにらみつける

「出すときは一声かける
目に入るとこだっただろ」

ふう

「とりあえず
これで借りは返した
それから
言うまでもないが
このことは誰にも
言うなよ」





「はあ……
なんでこうなっちゃったんだ」
紫髪の女がため息交じりに呟く
「えー！私だってお礼したいよー！」
答えたのは赤髪の女だ

ほく

ほ

「それじゃあ
好きな方を使ってね」
「もう好きにしてくれ……」
「対照的な二人を前に
相手の男も準備万端と
いったところだ」

男のものが挿入される
「うう、すごく大きい……」
小柄な彼女には
余計大きく感じられるのだろう
「無理そうならオレが」
「ううん、大丈夫だよ」

あっ♡

はぁ

はぁ♡

ピキッ

ピキッ

（こんな声初めて聞くな
いや、当然なんだが
……なんかこっちが
ドキドキしちゃもうこ
紫髪の女は相棒の
初めて見る一面に
どこか興奮していた



「だいでよろう……あうー！」
紫髪の女が再び心配の声を
掛けようとしたとき
男は挿入相手を替える

シッポ

アッ

「は、激しくするな！
落ることすだろ……んっ♡」
「こんな可愛い声出すんだ
赤髪の女もまた
相棒の新たな一面を見て
いつそ胸が高鳴るのを
感じた

あゝ





二人相手に限界を迎えた男は
そのまま射精する
「あゝ♡はあゝあゝ」
同時に紫髪の女も達する

「ねえ、私にもちようだい」
相棒の気持ちよさそうな
声を聞いたからか男にねだる

あゝあゝあゝ♡

ドブッ

びゅん

んも

射精後の敏感な状態で
即挿入する
彼女の狭い膈内を前に
男はすぐさま射精する

あああ
あっ
あっ

シューッ
シューッ
シューッ

「すごい♡
いっぱい出てるのわかるよ♡」
二度目でも変わらない
射精量を子宮に叩きつけられ
彼女も絶頂を迎えた



行為が終わると
二人の性器からは
ドロリと濃い精液が
垂れ出てくる



「これで少しは
恩が返せたかな？」
「オレたちに」「まだ
させたんだ
返せてないなんて
言わせないからな」

「んひいーもつとぢ」
 モンスター相手に意味があるのかわからない
 媚びるような演技をする
ほおっ
 少しでも生き残る確率が上がるなら
 という思いからだっただ……最初は

極限状態で痛みが麻痺したのか
 今はむしろ快樂の方が強くなっていた
 そして彼女はこの異常事態を受け入れた



今はただ快樂を食うだけの動物が
 そこにいた



そして獣のような声を上げて
彼女は絶頂した

ズ
ド

んほお
お
お
お



ズブウ！
「おほお！きたあつ♡」
股間に走る衝撃に彼女は歓喜に震える

トップクラスの冒険者になった彼女にとって
この階はもはや一人で散歩感覚で周れるようになっていた
そしていつからか、あのとときの感覚が忘れられず
一人でこっそり愉しむようになっていた

アッ！

異常なことだとはわかっている
だがそれがより一層彼女を興奮させた



「あはあ♡しゅごいよお！
だめえっ！そんなに激しくしたら
すぐイっちゃうからあ！」

モンスターーの動きに合わせて
自分が最も気持ちよくなれるよう
腰をくねらせる

そして
「もうイクーイっちゃうー！
イっくらイっくら♡」
普段の可愛らしい顔からは
想像できないような
下品な表情で絶頂した



「もおりやめえ！
ほんとに頭おかひくなりゆうう！」
絶え間なく快感を与えられ続け
女の精神は限界に近付いていた。

「それでいいんだよッ
素直に受け入れればもっと
気持ちよくなれるぜ？
くっくっくっ」
男は女が壊れていくのが
楽しくて仕方ないという風だった



絶叫すると
女は知性のかけらもない顔で達した



「あひいいいいいいい！」
「突きさされるたびに冒険者は悦びの声を上げる
最初はあるなに痛かったのに
今ではこの長さで太さでないとありえないと
思うようになっていた



ドブウウッ!
モンスター射精とともに冒険者も絶頂する
「んほおおおおおー! しゅい! のくりはうらうらっ♡」

おほおほ
おほおほ
おほおほ

ドブッ

ドブッ

可愛らしい彼女の面影は
もうそこにはなかった

彼女が悪戦苦闘していると
ニユルンッ
無防備な彼女の腔内に
モンスターが侵入してきた
「ああっ！そこは!!」

彼女の中で暴れまわるのかと思いきや
モンスターは優しく体を震わせるだけだった
「あっ！だ、だめです!この感覚……」
どうやらモンスターは
彼女の分泌物を吸収しているようだった

彼女の息が荒くなるにつれ
モンスターも動きを活発にし
より多く分泌物を出させようとする

あっ♡

はぁあ♡

プル

ニユル

プル





「頭おかひく
なつちやうくまひるまひる」

普段の清楚な姿からは
想像もできない顔で
彼女は快樂を食った

「なにこれえ
ざもぢいいいいいいい♡」
最初は痛みと嫌悪しかなかったが
時間が経つにつれ快感が上回っていった

ズ
ズ

ズ
ズ

ア
ア

あ
は
あ♡

モンスターの動きに合わせて
腰を動かしていることにも
気付かないほど行為に没頭していた



モンスターが射精を迎えると同時に
彼女も絶頂する

ド
ビュウ

ド
ビュウ

きたあ
あ

んほお

「子宮がわれちゃらう♡」
大量の精液が子宮を打ったひ
彼女は小刻みに震え
快楽に身を任せた





「なんで
犯されてるのって
きもちよすけなまうい♡」

触手から分泌される液体の効果で
彼女の頭は快楽に支配されていた

キッス

グッホ

そしてとどめと言わんばかりに
もう一本の触手が
彼女の肛門に突き刺さった

あびやああ
あ

あびやああああ！
じぬう！イきじぬうちゅっ♡
「脳の許容量を超えるほどの
快楽を与えられ
彼女は自分の頭が爆発したような
錯覚を覚えた」

ド
ッ





「これしめい」よおおお♡
「お、お前さつきを食わせたの
何かやばい……
んおおおおおお♡」

ほおおっ♡

ジュッパ

ッパ

グッパ

グッパ

おおお♡

行為の前に食べさせられた
樹海産のきのこの効果と
交互に激しく
突き入れられる肉棒に
二人の思考は
完全に飛ばされていた



「なからひろめええええ♡」
「やめっ…頭をかひく
なるん…」

呂律のまわっていない
叫び声をあげ絶頂した

おほおほおほ♡

らめええ♡

ビュ

ビュ

ピュ

ピュ



「うぶっ！オゲエエエエエエ」
内臓をかき回され
冒険者はたまらず吐き出した

ズッ

ゴゴゴ

吐瀉物が彼女の頬を伝わり
地面にビチャビチャと落ちていった



モンスターは
彼女の肛門から
体内へと侵入していく

「……E……ふっ
まもなく彼女は強烈な吐き気に襲われる

うっ
ん



モンスターが彼女の体内を通って
口まで出ていこうとしているようだった

「オエエエエエエエエッ」
彼女は耐え切れず胃の中身を吐き出す

オ
エ
エ
エ
エ



ズボオッ！
ついに彼女の口を内側からこじ開け
モンスターが飛び出す

喋ることも呼吸もできなくなった彼女の意識は
遠のきつつあった……

おはよう

アム

アム



ズーン

クワッ

「おええええつ」
モンスターのもものに内臓を突き上げられ
彼女はたまらず胃の中身をぶちまける



触手が彼女の肛門を貫く
だがそれだけでは終わらず
どんどん中へ中へと入っていく

自分の体の許容量を超えると
思われるほどの長さが入っていく様を見て
彼女は恐怖する

「そして
うわ!!」
彼女は猛烈な吐き気に襲われた

グッ
グッ

うわ



「オエエエエエエエ!」
吐き気に耐えられず
中身をぶちまけた

オ
エ
エ
エ
エ
エ



しかし直後
吐き気とはまた別のものが
上ってくる

うぶ

ギ

「うぶっ！おがああ！」
彼女の口から出てきたのは
触手の先端だった
彼女は朦朧とする意識の中
（こんなになっても死なないんだ
私の体ってすごいな）
と考えていた

「このれを舐めろっていうのか？
さっきまで尻に入ってた……」
茶色いものがこびりついた
それを前にして躊躇する

しかし
己を奮立たせ
恐る恐る震える舌を
伸ばした

ん〜ん





舌先が触れた時
「うっ...」
「オロオロ」
「オロ」
臭いと嫌悪感に負け彼女は
吐き出してしまった

びちゃ

うんえっ

びちゃ



「うぐっ！ゲホツ！おえええ！」
「うはっ！こいつ、口の中に入らんこ入ってやがる」
「バカだねえ、泣きわめくからだよ」

オエ

「いやああああ!!来ないでえつ!!」
半狂乱になり彼女は叫ぶ
樹海で大声を出すなど
敵に自分の居場所を教えるようなものだが
もはやそんなことを考える余裕はなかった

プツ、プスウ……
恐怖で弛んだ肛門から
ガスが漏れ出る
もつとも叫び声に音はかき消されていたが



ブリッ
ムリユムリユムリユ
そしてついに決壊した

そこでようやく違和感に気付いた
「あれ、私うち漏らしてる？」
力の抜けた肛門からは
今なお茶色い塊が漏れ出ている
「フフ、ウフフフフ」
恐怖心や羞恥心がないまぜになり
彼女はいつの間にか笑っていた

今はただ
この自分の無様な姿を見て
モンスターが興味を無くしてくれないかと
目の前の現実から逃避するだけであった



「痛うっ…早く早くっ！」
「真の青な顔でお腹を押さえ
小走りで駆けつけてきた彼女は
急いで下を脱ぎしやがみこんだ
「もお…なんでなのよ……」
野外料理を食べた後はたいでいこうだ
仲間は優しいが申し訳なささと恥ずかしさで
消えてしまいたくなる

本当なら軽く穴を掘って
そこにすべきだが
そんな余裕はない
今にも肛門をこじ開けて
中身が顔を出しそうだった

ビチィッ！ブチッピチッ！
水音がまじったような
放屁音があたりを響く
彼女は青かった顔を
今度は真っ赤にした



ブビイイイ!
ブピツピチチツ
ビチャビチャブチャアツ!!

爆音とともに彼女の肛門から
液状の便が噴出する
想像以上の音に
彼女はさらに顔を赤くする

（うう……こんな大きい音
絶対みんなに聞こえちゃう）
きつと仲間たちは
何事もなかったかのようにな
迎えてくれるのだからが
それで羞恥心が消えるわけではない
今は早く終わってくれと
祈ることしかできなかった





「あれやっからそいつの口開けさせてくれ
仲間の声をかけると男は果実であるのか？
携帯用の袋から取り出し女にしぼり汁を飲ませる
「ほっほっほっ！なんなんだそれは!!」
女の舌の上には甘さが広がるが
男たちが喜ばせるようなことを
するはずがないのはわかってる
「もう少し先で手に入れたもんだ
効果は……まあすぐにわかるさ」
男の言った通り効果はすぐ表れた
猛烈な腹痛が彼女を襲う
「おまえたち、まさか……っ！」
彼女の前を肯定していた

すると今度は女の脚を持ち
女の顔の横に押し付けていく
自然とお尻が上がつていき……
彼女は男たちがしているのか
何をしようとしているのか
完全に理解した
必死で抵抗しようとするが
体を折り曲げられ腹は圧迫され
もはや彼女の肛門は限界だった

ブリュッ！ミチミチツムウユツ！
天に向かつて伸びた便はやがてバランスを崩し倒れる
手切れた便が坂道を転がるようにして落ち
ちよほど女の顔の上で止まった
「ナイネキヤツチ！」
それを見た周りの男たちは爆笑する。

女は涙が出そうになるのを必死で堪える
精神修行はしていたが
怒り悲しみ悔しさ恥ずかしさ情けなさ
多くの感情を押しつぶされそうだった



モンスター級の規格外のものが突っ込まれると
行き場を無くした彼女のものは
押し出されるように肛門から出てくる



モンスターの動きに合わせて
ニユルニユルと排泄される様は
滑稽ですらあった

いやあ

ポトッ

ポトッ

「はやく！はやく！」
そう自分に言い聞かせながら
小走りで駆けてきた女性は
適当な場所を見つけたと
急いで下着を脱ぎ始めた

プツ…プスツ、プピン！
脱いでいる途中だがおならが細かく出てしまう
「待って！待って下さい！」
もはや祈るようにパンツに手をかけ急いで下ろす

ちゅん！
ちゅん！



ブリー!
ブビビビッ!
ムチムチムチイ!

はあ

ん

間一髪パンツを腿まで
下ろしたところで
彼女の肛門は決壊した
腰を下ろすのも忘れ
彼女は中腰の妙な恰好のまま
排泄を続けた





「あああああつ!!」
モンスターは彼女の腸内に
無遠慮に侵入していく

アハハ

「いっ……や……やめ
ぎ裂けてしま……す……」
消え入りそりな声で
彼女は懇願する

あつ

モンスタ―は彼女の腸内を奥まで進むと
あつさりと引き返していく
「……」
だがその時彼女は
何か違和感を覚えた

恐る恐るモンスタ―を見た彼女は
違和感の正体に気付く
半透明のモンスタ―の体の中に
透けて見えるのは自分の便だった
「わ、私の……吸収しているのですか？」

アムン

アムン

あ

んん

このようなかたちで
自分の排泄物を見せつけられ
彼女は今まで感じたことのない
羞恥を抱いた



「キレイにしてないって言ったのに無理やり入れるからですよウンチ塗れになってるじゃないですか」
そういうときつぎまで
自分のお尻の中をかき回していたものを
口元に運ぶ

モっ

ぽろぽろ

そしてぺろぺろと舐めとっていく
「もしかしてお客さん
ウチに舐めさせるためにわざと
やりましたね？」



「いやだあああああ！
死にたくない！死にたくないっ！！
助けてええええええええええ！！」
普段の凛とした姿はどこへいったのか
無様に命乞いする姿がそこにはあった

恐怖で弛んだ肛門から
おならが漏れていたが
彼女にそんな些細な事を
気にしている余裕はなかった

イスン

ン

ン

ヤ



「うっ…ヒツク…
だれか…助けて…」
とうとうボロボロと涙をこぼしながら
祈るように助けを求める言葉を
繰り返すだけになった

お尻から糞を漏らし
泣きながら助けを求める様子は
不様としか言いようがなかったが
それで助かるなら
彼女はなんだったよかった

プ
ッ
イ
ビ
ッ
ッ

ム
ッ

た。たすけ

ム
ッ



用を足そうと仲間から
離れた時だった
死角から伸びてきた触手に
彼女はあっさり絡めとられてしまった

なぜかモンスターは
彼女にとどめを刺さず
服を破っていく

彼女は疑問に思ったが
それとは別の問題も発生していた
体を折り曲げようとして
拘束されているせいで
お腹が圧迫されて
我慢ができなくなっていた

ブッ
ブッ
ブッ



最悪の事態は避けようと
力を入れて抵抗しようとしたときだった

ブリブリブリッ！
肛門を押し広げ中身が飛び出した

ちがっ

「違うっ！違うっ！」
無意識に彼女は叫んでいた
迷宮で漏らしてしまうことは
冒険者にはままあることと
聞いていたが
いざ自分の身に降りかかると
受け入れることはできなかった

ブリ
ブリ
ブリ





「く、糞するところが見たいとか
この変態野郎が！」
「怒らないで、ね？」
「私も恥ずかしいけど
二人一緒なら平気だよ」
「うう、わかってるさ」
「命の恩人のお願いはいいえ
さすがに排泄行為を
見られることには抵抗があった

しかし下剤替わりに
食べさせられた
木の實の効果で
二人のお腹は限界だった
きゅっとお閉じているつもり
の肛門からおならが
少しづつ漏れていた

ムリムリッ
プパツビチビチビチッ
示し合わせたかのように
二人同時に決壊する

「あんまり見ないでえ」
(うう、最悪だ
こんなときに下痢だなんて)

ムニ
ムニ
ムニ

ムニ
ムニ
ムニ



先ほどまでお尻の穴で蠢いていたモンスターは
今度は彼女の汚物を身にまといなながら
前の穴へと侵入する

「うそっ！やだっ！やだあっ！」
突然の出来事に固まっていた彼女は
そのまま蹂躞されるのだった





いつの間にか
モンスターの
残された彼女
彼女の汚物が
彼女自身の
秘部からは
垂れ落ちていた

「ど、どうしよう！！
と、とりあえず急いで洗わないと！」

悪夢のような出来事に
彼女の眼の端には
涙が浮かんでいた

腸内に侵入し便を吸い出したモンスターは
今度は彼女の膣を押し広げる
するとあるうことか便を中に入れ始めた

ガ
グ
グ

グ
グ
グ

ん
ん
ん

「えっ？なにが？」
いや、なにが起きたかはわかる
だが理解したくなかった



「こんな…虚です……」
モンスターが去った後も
彼女はそのままの状態
固まっていた

よく見ると腔内に入れられた便の量は
腸内にあつたころより減っていた
おそらくモンスターにとつては吸収しきれず
余った分を元の場所に戻したつもりだったのだろう

計り知れないほどのショックを
受けた彼女は
いまだ動けずにいた

アッ

アッ

アッ



肛門から侵入したモンスターは
彼女の体の中のものを押しながら
頭の方へ向かっていく

「うぶっ！オゲエエエエエエエ！」
彼女の口から茶色いものが吐き出される
それはついさつきまで
彼女のお腹の中にあつたものだった

ゲ
エ
エ
エ
エ



「今度はまたずいぶん長い間探索してたんですね
濃厚チーズがびっしり出来てますよ！」
顔を近づけるとツンと鼻を衝く強烈な臭いがした

ムフッ
レロオ

しかしそんな臭いも愛おしいのか
まったく意に介さず
舌を這わせいこそぎ取っていくのだった



「うっすうっすい臭いだな」
ツーンとした刺激臭が
彼女の鼻を攻撃する

「それに白いものが
こんなに……」
龟头を取り囲むように
びっしりと付いた
恥垢に眉を擡める

「わかってる
約束は約束だからな」



カリ首に舌を這わせ
こそぎ取つていく

「うえっ……
何日探索を続けければ
こんなことになるんだ」
愚痴りながらも
その動きは丁寧だった

しゅわ
しゅわ

しゅわ
しゅわ



「また溜めてきたのか
仕方のないやつだな」
しかしその顔はどこか嬉しそうだった

「お前のせいで
この味がくせになっちゃった」
そういうとスンスンと臭いを
堪能した後
恥垢を舐めとっていく

アロオ

アロオ

(臭いのにやめられない
臭いのにいい臭い……)





「……わかったよ
続きしてやるよ」

「ふん、キレイに……うってなんだ」「これは？
あつたよりおちきんになってるぞ」

ドキッ
ビクッ

ドキッ

口を伸ばし亀頭に吸い付く
ヂュパヂュパズロロロロ
下品な音が男を興奮させる

普段のクールな顔は崩れ
タコのように吸い付く
下品な口と大きな胸で
彼女はせめ続ける

ズ
る

ヂュ
パ

ズ
ズ
ズ

ズ
る
ん



耐え切れず男が射精する
「んっおっおっおっ」
突然の射精に彼女は驚きの表情を見せた

ブシュー

しかしそれも一瞬のこと
出された精液を
ゴクリゴクリと
飲み込んでいくのだった

